

関係各位

京都府病虫害防除所長
(公 印 省 略)

病虫害発生予察情報について
下記のとおり発表しましたので送付します。

病虫害発生予報第 6 号 (8 月)

予報の概要

作物名	病虫害名	予想発生量 < 平年比 (前年比) >	作物	病虫害名	予想発生量 < 平年比 (前年比) >
イネ	いもち病 (穂いもち)	並 (やや少)	チャ	炭そ病	山城: 並 (並) 丹波: <u>やや多</u> (やや少) 丹後: 並 (並)
	紋枯病	並 (並)		もち病	山城: <u>やや多</u> (並) 丹波: 並 (並) 丹後: やや少 (並)
	セジロウンカ	並 (多)		チャノコカクモンハマキ	山城: 並 (並) 丹波: 並 (並) 丹後: 並 (やや少)
	トビイロウンカ	並 (やや少)		チャノホソガ	山城: やや少 (並) 丹波: 並 (並) 丹後: 並 (並)
	ツマグロヨコバイ	並 (多)		カンザワハダニ	山城: <u>やや多</u> (やや多) 丹波: 並 (少) 丹後: 並 (やや少)
	斑点米カメムシ類	<u>やや多</u> (並)		チャノミドリヒメヨコバイ	山城: <u>やや多</u> (並) 丹波: <u>やや多</u> (やや少) 丹後: 並 (やや少)
	コブノメイガ	並 (並)		チャノキロアサミウマ	山城: 並 (多) 丹波: <u>やや多</u> (やや多) 丹後: <u>やや多</u> (やや多)
黒大豆	吸実性カメムシ類	並 (並)	野菜	果菜類 うどんこ病	並 (並)
	サヤムシガ類	やや少 (少)		キュウリ ベと病	並 (多)
	ハスモンヨトウ	<u>やや多</u> (多)		キュウリ 褐斑病	並 (並)
	ハダニ類	<u>やや多</u> (並)		キュウリ 炭そ病	<u>やや多</u> (やや多)
アズキ	ハスモンヨトウ ハダニ類	<u>やや多</u> (多) <u>やや多</u> (並)		トウガラシ・キュウリ	並 (並)
				斑点細菌病	並 (並)
ナシ	黒斑病 ハダニ類	<u>やや多</u> (やや多) 並 (並)		野菜全般 ハダニ類	<u>やや多</u> (やや多)
				果菜類 ハモクグリハエ類	並 (やや多)
ブドウ	べと病	<u>やや多</u> (多)		果菜類 アサミウマ類	<u>やや多</u> (やや多)
カキ	炭そ病 うどんこ病	並 (並) <u>やや多</u> (やや多)		ネギ ^レ ネギ ^ア アサミウマ	<u>多</u> (並)
カンキツ	ハダニ類	<u>やや多</u> (多)	ネギ ^レ ネギ ^ハ ハモクグリハエ	並 (並)	
果樹全般	カメムシ類	並 (やや少)	エ	並 (並)	
			野菜全般 ハスモンヨトウ	<u>やや多</u>	

目次

予報の概要	1
予報本文	2
今後注意すべきその他の病虫害等	16
参考 I 気象予報	17
II 用語の定義	18
III 予報の見方	18
IV 短期暴露評価の実施に伴う農薬の変更登録について	19

予報本文

イネ

1 いもち病（穂いもち）

予報内容 発生量：平年並（前年比やや少ない）

予報の根拠

(1) 7月中旬現在、葉いもちの発生量は平年並。

項目	本年	平年値
発生ほ場率(%)	16.7	23.1
発病株率(%)	5.6	8.3
発病度	1.6	2.4

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く（－）、降水量は平年並、日照時間は平年並または多い（－）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 上位葉へ進展した葉いもちの病斑は、穂いもちの重要な伝染源となる。
- (2) 穂ばらみから出穂後約3週間に、日照時間が少なく多雨多湿であると発生が多くなる。
- (3) コシヒカリなど発病しやすい品種や、すでに葉いもちが多発している田、山間部などでは特に注意し、防除適期に薬剤防除を実施する。
- (4) 粒剤は種類により施用時期が決まっているので、適期に施用する。
- (5) カメムシとの同時防除剤を使用する場合は、出穂直前から穂揃期に散布する。
- (6) 平成25年度に中丹地域、平成26年度に南丹地域の一部においてストロビルリン系薬剤（QoI剤）耐性菌の発生を確認した。耐性菌の発生地域ではいもち病に対するQoI剤の使用を中止し、他系統の薬剤（抵抗性誘導剤、MBI-R剤等）を使用する。QoI剤を使用したほ場で、防除効果の低下が疑われる場合は、他系統の薬剤で追加防除を行うとともに、速やかに病害虫防除所または、関係機関に連絡する。詳細は京都府病害虫防除所ホームページ（アドレス http://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/news20131113_1.pdf）を参照のこと。

2 紋枯病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

(1) 7月中旬現在、発生を認めている（平年並）。

項目	本年	平年値
発生ほ場率(%)	6.7	9.0
発病株率(%)	0.3	1.1
発病度	0.1	0.2

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く（＋）、降水量は平年並、日照時間は平年並または多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 早植栽培で発生が多く、気温30℃前後で多湿条件が続くと多発する。
- (2) 例年発生の多いほ場や分けつの多いほ場では発生が多くなるので十分注意する。
- (3) 昨年多発したほ場では、深水管理をしない。
- (4) 出穂20日前の発病株率が20%以上であれば薬剤散布を行う。散布は発病部である葉鞘によく付着するように株元を狙って行うようにする。なお、穂いもちとの同時防除を考慮する。

3 セジロウシ

予報内容 発生量：平年並（前年比多い）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、本田見取り調査での発生量は平年並、本田すくい取り調査では平年比やや少ない(－)。

本田見取り調査結果

項目	本年	平年値
発生ほ場率(%)	56.7	67.5
虫数(頭)	8.3	6.5

※本田25株見取り調査。

本田すくい取り調査結果

項目	本年	平年値
発生ほ場率(%)	23.3	62.1
虫数(頭)	1.3	11.1

※本田20回すくい取り調査。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 海外からの飛来害虫である。
 (2) 成幼虫とも吸汁加害するので、株当たり10匹以上の発生を認めた場合は防除する。なお、幼虫は株元に生息しているので、薬剤が株元までかかるよう丁寧に散布する。

4 トビイロウンカ

予報内容 発生量：平年並（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 7月15日現在、予察灯への誘殺を認めていない。
 (2) 7月中旬の巡回調査では、発生を認めていない（平年並）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 海外からの飛来害虫であり、今後発表される病害虫発生予察情報に注意する。
 (2) 株当たり5匹以上もしくは短翅虫を10株当たり2匹以上認めた場合は、直ちに防除する。この場合、薬剤が株元に十分かかるよう散布する。

5 ツマグロヨコバイ

予報内容 発生量：平年並（前年比多い）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、本田見取り及び本田すくい取り調査での発生量は平年並。

本田見取り調査結果

項目	本年	平年値
発生ほ場率(%)	16.7	38.0
虫数(頭)	4.3	2.7

※本田25株見取り調査。

本田すくい取り調査結果

項目	本年	平年値
発生ほ場率(%)	13.3	28.7
虫数(頭)	2.3	1.5

※本田20回すくい取り調査。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 穂ばらみ期から出穂期に高密度であると吸汁による被害が生じる。また、排泄物により、すす病が発生する。

6 斑点米カメムシ類

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年並）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、本田及び畦畔での発生量は平年並。

項目		本年	平年値
本田	発生ほ場率(%)	6.7	16.7
	虫数(頭)	0.2	0.3
畦畔	発生ほ場率(%)	43.3	53.5
	虫数(頭)	2.9	7.6

※20回すくい取り調査。

- (2) アカスジカスミカメ及びアカヒゲホソミドリカスミカメの予察灯への誘殺数は平年並。

アカスジカスミカメ予察灯調査結果

場所	本年	平年値
京田辺	1.0	1.3
亀岡	34.0	41.8
京丹後	24.0	111.9

※6月第1半旬～7月第3半旬までの合計誘殺虫数(頭)。

アカヒゲホソミドリカスミカメ予察灯調査結果

場所	本年	平年値
京田辺	6.0	18.8
亀岡	15.0	42.2
京丹後	46.0	114.8

※6月第1半旬～7月第3半旬までの合計誘殺虫数(頭)。

- (3) 向こう1か月の気温は平年比高い(+)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 稲穂を吸汁加害し、斑点米の原因となるカメムシ類には多くの種類がいるが、近年、カスミカメ類による被害が増加している。
- (2) 水田周辺のイネ科雑草の穂を餌にして増殖し、本田へ侵入するので、草刈りを行い、イネ科雑草の出穂を防ぐ。
- (3) 草刈りは出穂2～3週間前と出穂直前の2回行うと効果的である。1回で済ませる場合は、出穂10日前までに行う。なお、刈取り時期が遅れると逆効果になるので注意する。
- (4) 薬剤防除を行う場合、粉剤や液剤では穂揃期と傾穂期の2回防除(共同、一斉)が有効である。また、粒剤では種類により施用時期が決まっているので、適期に施用する。
- (5) 平成22年に、府内で初めてミナミアオカメムシの発生を確認した。平成27年5月中旬から京田辺市の予察灯で本種の誘殺を確認している。本種は他の斑点米カメムシ類に比べて体が大きく吸汁量が多いため、少数でも被害が大きくなるので注意する。

*** 詳細 平成27年6月23日付の発生予察注意報第2号を参照**

7 コブノメイガ

予報内容 発生量：平年並(前年並)

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生を認めていない(平年並)。

項目	本年	平年値
発生ほ場率(%)	0.0	2.3
虫数(頭)	0.0	0.0

※本田25株見取り調査。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 海外からの飛来害虫である。
- (2) 晩植・多肥田やこれらの水口付近、生育の遅いイネに集中飛来するので注意する。

※今後注意すべきその他の病虫害等はp16を参照

黒大豆

1 吸実性カメムシ類

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

（1）7月第3半旬現在、予察灯(60W)への誘殺は認めていない（平年並）。

種類	場所	本年	平年値
アオクサカメムシ	京田辺市	0	0.1
	亀岡市	0	0.2
	京丹後市	0	0.0
イチモンジカメムシ	京田辺市	0	0.3
	亀岡市	0	0.9
	京丹後市	0	0.3

*誘殺数(頭)：6月第4半旬～7月第3半旬の合計値

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 開花期直前から着莢期に飛来し始める。
- (2) ほ場周辺に雑草地などカメムシ類の発生しやすい場所があると、被害を受けやすいので、早期発見に努める。
- (3) 薬剤散布は着莢期から10日間隔で2～3回実施する。

2 サヤムシガ類

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比少ない）

予報の根拠

（1）7月中旬現在、発生量は平年比やや少ない（－）。

項目	本年	平年値
被害株率	7.0	10.8

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年3～4回発生する。
- (2) カメムシ類との同時防除を考慮する。

3 ハスモンヨトウ

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比多い）

予報の根拠

（1）7月第3半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は平年比やや多い（＋）。

場所	本年	平年値
京田辺市	84.6	95.5
亀岡市	175.0	76.6
京丹後市	187.0	105.6

*誘殺数(頭)：6月第4半旬～7月第3半旬の合計値

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 数百個の卵を塊状に産みつけ、ふ化した幼虫は若齢期（1～2齢）を集団で過ごし、葉の表皮を残して裏側を食害する。食害された葉は白く見えることから白変葉と呼ばれる。
- (2) 齢が進んだ幼虫は周囲に分散し、かつ、薬剤の効力が著しく低下するので、発生初期の防除に留意する。
- (3) ほ場を見回り早期発見に努め、幼虫分散前の白変葉を取り除く。

4 ハダニ類

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年並）

予報の根拠

（1）7月中旬現在、発生量は平年並。

項目	本年	平年値
寄生株率	0.5	0.4

（2）向こう1か月の気温は平年比高く（+）、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（1）増殖が速く、高密度になってからでは防除効果が劣る。

（2）晴天が続くと多発しやすいので注意する。

アズキ

1 ハスモンヨトウ

黒大豆の項参照。なお、ダイズに比べ白変葉が見つげにくいので注意する。

2 ハダニ類

黒大豆の項参照。

※今後注意すべきその他の病虫害等はp16を参照

果樹

1 ナシ 黒斑病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

（1）7月中旬現在、発生量は平年比やや多い（+）。

項目	本年	平年値
発病葉率(%)	3.5	2.3

（2）向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（1）例年8月下旬から9月にかけて発生が増加するので、8月中下旬までに防除する。

2 ブドウ ベと病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比多い）

予報の根拠

（1）7月中旬現在、発生量は平年比やや多い（+）。

項目	本年	平年値
発病葉率(%)	6.3	4.8

（2）向こう1か月の気温は平年比高く（-）、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（1）雨が多く、気温が低めに経過すると多発しやすい。

（2）ハウス栽培では、過繁茂を避け通風をよくする。

3 カキ 炭そ病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

(1) 7月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。

項目	本年	平年値
発病果率(%)	0.0	0.0

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) カキノヘタムシガ、ハマキムシなどの食害部から発病することが多い。

4 カキ うどんこ病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

(1) 7月中旬現在、発生量は平年比やや多い（+）。

項目	本年	平年値
発病葉率(%)	31.7	24.7

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く（-）、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 気温が低くて涼しい夏には発病が進展する。

5 果樹全般 カメムシ類

予報内容 発生量：平年並（前年比やや少ない）

予報の根拠

(1) 7月第3半旬現在、予察灯(BL)への誘殺数は平年並。

場所	本年	平年値
京田辺市	1	63.3
亀岡市	0	2.6
京丹後市	5	44.4

*誘殺数(頭)：6月第4半旬～7月第3半旬の合計値

(2) 7月第3半旬現在、フェロモントラップへの誘殺は平年並。

場所	本年	平年値
京田辺市	0.0	16.8
亀岡市	24.4	23.7
京丹後市	4.0	9.7

*誘殺数(頭)：6月第4半旬～7月第3半旬の合計値

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 果実被害は園により大きく異なる。特に、山林等の隣接園では注意する。

(2) 収穫が近いものも多いため、農薬の使用にあたっては使用基準を厳守する。

(3) 合成ピレスロイド系薬剤を連用するとカイガラムシ類やハダニ類の発生が増えることがある。

6 ナシ・カンキツ ハダニ類

予報内容 発生量：ナシ 平年並（前年並）
カンキツ 平年比やや多い（前年比多い）

予報の根拠

（1）7月中旬現在、発生量はナシで平年並、カンキツで平年比やや多い（+）。

作物	項目	本年	平年値
ナシ	寄生葉率(%)	15.2	20.9
カンキツ	寄生葉率(%)	31.0	11.1

（2）向こう1か月の気温は平年比高く（+）、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（1）晴天が続くと多発しやすいので注意する。
（2）合成ピレスロイド系薬剤を連用すると、ハダニ類が多発する場合がありますので注意する。

チャ

1 炭そ病

予報内容 発生量：山城 平年並（前年並）
丹波 平年比やや多い（前年比やや少ない）
丹後 例年並（前年並）

予報の根拠

（1）6月中旬現在の発生量は、山城で平年並、丹波で平年比やや多く（+）、丹後で例年並。

地域	項目	本年	平年値
山城	発病葉数(㎡当たり)	0.3	0.7
	発生ほ場率(%)	10.0	15.2
丹波	発病葉数(㎡当たり)	2.0	2.2
	発生ほ場率(%)	50.0	43.7
丹後	発病葉数(㎡当たり)	0.8	0.5
	発生ほ場率(%)	25.0	25.0

（2）向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（1）伝染源は、摘採されずに残った前茶期の病葉である。
（2）本病が感染するのは新葉に限られ、新芽伸育期に降雨が続くと発生が多くなる。
（3）防除適期は、夏秋茶芽の第1～2葉開葉期である。

2 もち病

予報内容 発生量：山城 平年比やや多い（前年並）
丹波 平年並（前年並）
丹後 例年比やや少ない（前年並）

予報の根拠

（1）7月中旬現在の発生量は、山城で平年比多く（+）、丹波、丹後で発生を認めなかった（平年（例年）並）。

地域	項目	本年	平年値
山城	発病葉数(m ² 当たり)	1.3	0.0
	発生ほ場率(%)	30.0	1.4
丹波	発病葉数(m ² 当たり)	0.0	0.0
	発生ほ場率(%)	0.0	0.0
丹後	発病葉数(m ² 当たり)	0.0	0.0
	発生ほ場率(%)	0.0	0.0

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並、日照時間は平年並または多い(－)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 病斑上に形成された担子胞子が風雨で飛散し、新芽に感染する。
- (2) 山間地で発生が多い。
- (3) 防除適期は、新芽伸育期である。

3 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：山城 平年並(前年並)
丹波 平年並(前年並)
丹後 例年並(前年比やや少ない)
発生時期：第3世代幼虫ふ化期
山城 8月第2～4半旬(平年並)
丹波 8月第3～5半旬(平年比やや遅い)

予報の根拠

(1) 7月中旬現在、第2世代幼虫の発生量は山城、丹後で発生を認めず(山城：平年並、丹後：例年並)、丹波で平年並であった。

地域	項目	本年	平年値
山城	綴葉数(m ² 当たり)	0.0	0.4
	幼虫数(m ² 当たり)	0.0	0.2
	発生ほ場率(%)	0.0	7.4
丹波	綴葉数(m ² 当たり)	5.3	3.0
	幼虫数(m ² 当たり)	1.7	1.7
	発生ほ場率(%)	50.0	46.7
丹後	綴葉数(m ² 当たり)	0.0	0.8
	幼虫数(m ² 当たり)	0.0	0.3
	発生ほ場率(%)	0.0	3.1

(2) 第1世代成虫の発生時期は宇治市は平年並、綾部市では平年比やや遅い。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、4回世代を繰り返し、第2世代成虫が7月下旬～8月上中旬に発生し産卵する。
- (2) ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。

4 チャノホソガ

予報内容 発生量：山城 平年比やや少ない(前年並)
丹波 平年並(前年並)
丹後 例年並(前年並)
発生時期：第4世代幼虫ふ化期
山城 8月第3半旬～4半旬(平年比やや早い)
丹波 8月第4半旬～5半旬(平年並)

予報の根拠

(1) 7月中旬現在、第3世代幼虫の発生量は山城で平年比やや少なく(－)、丹波、丹後で平年(例年)並。

地域	項目	本年	平年値
山城	寄生芽率(%)	1.0	10.6
	巻葉数(㎡当たり)	0.1	0.9
	発生ほ場率(%)	30.0	46.8
丹波	寄生芽率(%)	4.5	2.3
	巻葉数(㎡当たり)	0.0	0.8
	発生ほ場率(%)	33.3	48.5
丹後	寄生芽率(%)	5.5	17.8
	巻葉数(㎡当たり)	3.0	6.2
	発生ほ場率(%)	100.0	57.1

(2) 第2世代成虫の発生時期は宇治市で平年比やや早く、綾部市で平年並。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、5回世代を繰り返し、第3世代成虫が8月上中旬に発生し産卵する。
(2) 卵は3～7日でふ化し、新芽を加害する。
(3) 弧状仕立て園の防除適期は、夏秋茶芽の第2葉開葉期である。

5 カンザワハダニ

予報内容 発生量：山城 平年比やや多い(前年比やや多い)
丹波 平年並(前年比少ない)
丹後 例年並(前年比やや少ない)

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生量は山城で平年並、丹波で平年比やや少なく(－)、丹後で発生を認めなかった(例年比やや少ない)。

地域	項目	本年	平年値
山城	寄生葉率(%)	2.3	3.2
	寄生虫数(100葉当たり)	5.8	5.6
	発生ほ場率(%)	35.0	35.5
丹波	寄生葉率(%)	0.7	3.8
	寄生虫数(100葉当たり)	1.3	14.9
	発生ほ場率(%)	16.7	39.7
丹後	寄生葉率(%)	0.0	3.5
	寄生虫数(100葉当たり)	0.0	13.9
	発生ほ場率(%)	0.0	56.3

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 繁殖力は10～30℃の範囲で高温の時ほど高いが、降雨により増殖が抑制される。

6 チャノミドリヒメヨコバイ

予報内容 発生量：山城 平年比やや多い(前年並)
丹波 平年比やや多い(前年比やや少ない)
丹後 例年並(前年比やや少ない)

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生量は山城、丹波で平年比やや多く(+)、丹後で発生を認めていない(例年並)。

地域	項目	本年	平年値
山城	寄生・被害芽率(%)	8.2	3.0
	発生ほ場率(%)	58.3	30.8
丹波	寄生・被害芽率(%)	8.0	7.2
	発生ほ場率(%)	50.0	43.3
丹後	寄生・被害芽率(%)	0.0	1.1
	発生ほ場率(%)	0.0	14.3

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 主に新梢を加害し、新芽の被害症状は黄化、萎縮、葉先の褐変、黒変等である。
- (2) 防除適期は、新芽伸育期である。
- (3) 薬剤の使用に当たっては、同一系統の使用を避ける。

7 チャノキイロアザミウマ

予報内容 発生量：山城 平年並（前年比多い）
丹波 平年比やや多い（前年比やや多い）
丹後 例年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生量は山城で平年比やや少なく（－）、丹波で平年並、丹後で例年並。

地域	項目	本年	平年値
山城	寄生・被害芽率(%)	24.7	49.3
	発生ほ場率(%)	90.9	98.5
丹波	寄生・被害芽率(%)	10.0	17.5
	発生ほ場率(%)	75.0	81.7
丹後	寄生・被害芽率(%)	10.5	8.9
	発生ほ場率(%)	75.0	67.9

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く（＋）、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 主に二番茶以後に増加し、夏秋茶芽を吸汁加害する。
- (2) 多雨により発生は減少するが、生息密度が高い場合は注意する。
- (3) 発生の多い園では、夏秋茶芽の萌芽期と第1葉開葉期に2回防除を行うと効果が高い。
- (4) 薬剤の使用に当たっては、同一系統の使用を避ける。

※今後注意すべきその他の病害虫等は p 16 を参照

野菜

1 果菜類 うどんこ病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在の発生量はキュウリ、ナスともに平年並。

作物	項目	本年	平年値
キュウリ	発病株率(%)	16.7	21.1
ナス	発病株率(%)	1.5	4.8

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 窒素肥料の過用を避け、茎葉が繁茂し過ぎないようにする。
- (2) トウガラシ類では、ハダニ類の被害と類似しており判断がつきにくいので十分注意する。

2 キュウリ ベと病

予報内容 発生量：平年並（前年比多い）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生量は平年並。

項目	本年	平年値
発病葉率(%)	24.7	20.1
発病株率(%)	38.7	33.0

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く(－)、降水量は平年並と予想されている。
- (3) 病害虫調査協力員及びJA、普及センターから、現地で発生が目立つ病害虫として情報が寄せられている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 病原菌は、多湿条件で侵入、まん延しやすい。
- (2) 肥切れしたり草勢が衰えないように肥培管理に注意する。

3 キュウリ 褐斑病

予報内容 発生量：平年並(前年並)

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生を認めていない(平年並)。

項目	本年	平年値
発病葉率(%)	0.0	0.4
発病株率(%)	0.0	1.0

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 病原菌の発病適温は25～30℃である。
- (2) 一度発生したほ場では、毎年発生がみられることが多い。

4 キュウリ 炭そ病

予報内容 発生量：平年比やや多い(前年比やや多い)

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生量は平年比やや多い(+)

項目	本年	平年値
発病葉率(%)	0.7	0.2
発病株率(%)	6.0	1.3

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並と予想されている。
- (3) 病害虫調査協力員及びJA、普及センターから、現地で発生が目立つ病害虫として情報が寄せられている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 夏秋作に発生しやすいので注意する。
- (2) 窒素肥料の過用を避ける。

5 キュウリ・トウガラシ 斑点細菌病

予報内容 発生量：平年並(前年並)

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、キュウリで発生を認めていない(平年並)。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 降雨等により病原細菌が飛散し、果実及び葉の気孔等から入って発病する機会が多い。
- (2) 曇雨天が続くと急速にまん延するので、気象の変化に注意する。
- (3) 発生してからでは防除が困難となるので、予防防除が重要である。

6 野菜全般 ハダニ類（チャノホコリダニを含む）

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

（1）7月中旬現在の発生量は、キュウリ、ナスともに平年比やや多い（+）。

作物	項目	本年	平年値
キュウリ	寄生葉率(%)	6.0	2.3
	発生ほ場率(%)	50.0	23.9
ナス	寄生葉率(%)	2.1	2.2
	発生ほ場率(%)	62.5	21.6

（2）向こう1か月の気温は平年比高く（+）、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（1）薬剤が葉裏や生長点にかかるよう丁寧に散布する。

（2）ハダニ類は薬剤に対する抵抗性が生じやすいので注意する。

（3）雨よけ栽培では発生しやすいので十分注意し、発生初期の防除に留意する。

7 果菜類 ハモグリバエ類

予報内容 発生量：平年並（前年比やや多い）

予報の根拠

（1）7月中旬現在、発生量はキュウリで平年比やや少なく（-）、ナスで平年比少ない（-）。

作物	項目	本年	平年値
キュウリ	被害葉率(%)	1.7	7.3
	被害株率(%)	5.3	23.2
ナス	被害葉率(%)	0.0	4.4
	被害株率(%)	0.0	23.9

（2）向こう1か月の気温は平年比高く（+）、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（1）トマトハモグリバエは、8月以降多発する傾向がある。

（2）定植時には、葉等に寄生していないことを確認する。

（3）発生を認めたら被害葉を取り除き、発生初期の防除に留意する。

8 果菜類 アザミウマ類

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

（1）7月中旬現在、発生量はキュウリで平年並、ナスで平年比やや多い（+）。

作物	項目	本年	平年値
キュウリ	寄生虫数(頭/葉)	0.42	1.75
	寄生葉率(%)	18.0	21.3
ナス	寄生虫数(頭/葉)	0.09	0.05
	寄生葉率(%)	3.9	3.1

（2）向こう1か月の気温は平年比高く（+）、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（1）雨よけ栽培では発生が多くなるので注意する。

（2）アザミウマ類には、直接加害するだけでなく、ウイルス病を媒介する種もいる。

本年5月、京都府南部地域の露地栽培トマトにおいて、また、6月には露地栽培トウガラシにおいて、ミカンキイロアザミウマが媒介するトマト萎えそ病（仮称）及びトウガラシ・ピーマンえそ輪点病が確認された。

両病害はともに、キク茎えそウイルス(Chrysanthemum stem necrosis virus:CSNV)による病害で、本病の防除にはミカンキイロアザミウマに対する薬剤散布や、防虫ネット、UVカットフィルムによる物理的防除が効果的である。

詳細については、6月5日発表の発生予察特殊報第1号(トマト茎えそ病(仮称))(<http://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/tokusyuh01.pdf>)及び6月26日発表の特殊報第2号(トウガラシ・ピーマンえそ輪点病)(<http://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/tokusyuh02.pdf>)を参照のこと。

9 ネギ ネギアザミウマ

予報内容 発生量：平年比多い(前年並)

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生量は平年比多い(+)

項目	本年	平年値
被害株率(%)	97.0	38.3
被害度	34.5	16.5

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間10世代以上くり返し、葉の表層を食害、かすり状の食害痕を残す。
 (2) 葉鞘分岐部や葉折れの内側に多く寄生する。
 (3) ネギの被害残さが発生源となるので注意する。

- (4) 本種は昨年6月以降、府内で発生を確認しているネギえそ条斑病を媒介する。

- (5) ネギえそ条斑病は、アイリス黄斑ウイルス(Iris yellow spot virus: IYSV)による病害で、本病の防除にはネギアザミウマに対する薬剤散布や、防虫ネットやUVカットフィルムによる物理的防除が効果的である。

詳細については、京都府病害虫防除所ホームページの情報

(アドレス<http://www.pref.kyoto.jp/byogai/1233108010046.html>)や5月25日発表の発生予察注意報第1号(ネギアザミウマ・ネギえそ条斑病)

(<http://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/tyuiho201505.pdf>)を参照のこと。

10 ネギ ネギハモグリバエ

予報内容 発生量：平年並(前年並)

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生量は平年比やや少ない(-)

項目	本年	平年値
被害株率(%)	52.0	69.4
被害度	13.0	27.8

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫が葉肉部分を加害し、白い筋状の食害痕を残す。

11 野菜全般 ハスモンヨトウ

予報内容 発生量：平年比やや多い

予報の根拠

- (1) 7月第3半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は平年比やや多い(+)

場所	本年	平年値
京田辺市	84.6	95.5
亀岡市	175.0	76.6
京丹後市	187.0	105.6

※誘殺数(頭):6月第4半旬~7月第3半旬の合計値

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 数百個の卵を塊状に産みつけ、ふ化した幼虫は若齢期(1~2齢)を集団で過ごし、葉の表皮を残して裏側を食害する。
- (2) 齢が進んだ幼虫は周囲に分散し、かつ、薬剤の効力が著しく低下するので、発生初期の防除に留意する。

※今後注意すべきその他の病害虫等は p 1 6 を参照

今後注意すべきその他の病害虫等

イネ

1 白葉枯病

- (1) 暴風雨などが予想される時は深水にするなど、極力葉の損傷を少なくするよう努める。
- (2) 窒素肥料の多用を避けるほか、露や濡れ葉状態の時にはほ場に入らないなど注意する。

2 フタオビコヤガ（イネアオムシ）

- (1) 山間・山沿い地域や集落周辺など、風通しの悪い水田で多発しやすく、また、曇雨天が多い年に発生しやすい。
- (2) 出穂前後に発生する世代の加害が多いと被害が出る場合がある。幼虫が4、5齢に成長すると摂食量が増加するため、被害が急激に拡大するので注意する。

3 ニカメイガ（ニカメイチュウ）

- (1) 発蛾最盛期は通常、8月第4半旬である。
- (2) 第1世代幼虫による被害が目立ったほ場、茎の太い品種やモチの作付田では発生しやすい。
- (3) 野菜・チャ・イチジク等の栽培で稲わらを使用する地域では、発生しやすいので注意する。

アズキ

1 アズキノメイガ、マメノメイガ、サヤムシガ類、オオタバコガ

- 発生すると被害が大きく、莢に食入すると防除が難しいので、開花始めから7～10日間隔で少なくとも2回は防除を行う。

チャ

1 チャトゲコナジラミ

- 7月中旬の巡回調査では、府内全域で発生を確認している。本種の農薬による防除適期は若齢幼虫期（8月第1～2半旬）である。成虫期の散布では密度抑制効果が不十分であるため、成虫の飛翔が落ちついた頃を見計らって薬剤散布を行う。

野菜

1 オオタバコガ、タバコガ、シロイチモジヨトウ

- フェロモントラップへのオオタバコガやタバコガの誘殺数が増加している。発生が多くなると、大きな被害になるので注意する。
オオタバコガ及びタバコガは果実に食入すると、またシロイチモジヨトウは齢が進むと、薬剤の効力が低下するので、早期発見に努め、食入前及び若齢期の防除に留意する。

2 カメムシ類（トマト、ナス、トウガラシ、インゲン等）

- 周囲に雑草地やダイズなどカメムシ類の発生しやすいほ場があると、被害を受けやすいので、早期発見に努める。
平成22年に、府内で初めてミナミアオカメムシの発生を確認した。本年は5月中旬から京田辺市の予察灯で本種の誘殺を確認している。本種はナス、トマト等の果実を加害するので注意する。

参 考

I 近畿地方 1 か月予報 (7月18日から8月17日までの天候見通し)

平成27年7月16日
大阪管区气象台発表

<予想される向こう1か月の天候>

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。日照時間は、平年並または高い確率ともに40%です。

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気 温	20	30	50
降 水 量	30	40	30
日 照 時 間	20	40	40

病虫害防除所では上記の天候の1か月予報の表現を「向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並、日照時間は平年並または多いと予想されている。」としました。

II 用語の定義

1 半旬のとり方

各月の	第1半旬	第2半旬	第3半旬	第4半旬	第5半旬	第6半旬
	1~5	6~10	11~15	16~20	21~25	26~最終
	日	日	日	日	日	日

2 発生量 --- 病虫害の発生程度と広がり両面を加味したものをいう。

3 平年値 --- 原則として過去10か年の平均とする。
データが10年に満たない場合は例年値とする。

4 平年値との比較

1) 時期

平年並	平年値を中心として前後2日以内
やや早い	平年値より3~5日早い
やや遅い	平年値より3~5日遅い
早い	平年値より6日以上早い
遅い	平年値より6日以上遅い

2) 量(発生量、発生面積等)

平年並	平年値並の発生で10年間に4回は発生する程度の普通の量
やや多い	「平年並」より発生が多く、10年間に2回程度の頻度で発生する量
やや少ない	「平年並」より発生が少なく、10年間に2回程度の頻度で発生する量
多い	「やや多い」より多く、10年間に1回程度しか発生しない量
少ない	「やや少ない」より少なく、10年間に1回程度しか発生しない量

Ⅲ 予報本文の見方

「予報本文」の見方をチャノコカクモンハマキを例に示します。

1 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：山城 平年比やや多い（前年比やや多い）
 丹波 平年並（前年並）
 丹後 例年並（前年並）

- ・「予報内容」は、今後の病害虫発生状況や発生時期の予測を平年比で示しています。
- ・平年比の見方は、「Ⅱ 用語の定義、4 平年値との比較」を参照してください。
- ・（ ）内の前年比は予想月の前年の発生量（時期）との比較です。
- ・必要に応じて地域別に示します。

予報の根拠

- (1) 前年10月の発生量は、山城、丹波、丹後で平年並の発生。
 (2) 4月中旬現在、山城で平年比多く（+）、丹波、丹後で発生を認めていない（平年（例年）並）。

地域	項目	4月の調査結果	4月 平年値
山城	綴葉数 (/m ²)	3.0	0.1
	幼虫数 (/m ²)	0.5	0.0
	発生ほ場率 (%)	22.7	3.7
丹波	綴葉数 (/m ²)	0.0	0.5
	幼虫数 (/m ²)	0.0	0.0
	発生ほ場率 (%)	0.0	11.7
丹後	綴葉数 (/m ²)	0.0	0.0
	幼虫数 (/m ²)	0.0	0.0
	発生ほ場率 (%)	0.0	0.0

- ・「予報の根拠」として直近の巡回調査のデータの中で主だったものを示しています。平年値も記載しているので、防除等の目安としてください。

- (3) 4月中旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は、宇治で平年比少（-）。

- ・「予報の根拠」は、巡回調査の結果、天候、フェロモントラップや予察灯への誘殺状況、指導機関からの情報等、「予報内容」で示した発生量や発生時期の予測の根拠となった事項を記載しています。
- ・文中の（-）、（+）は、予測される発生量に影響を及ぼすと考えられるもので、（-）の場合発生が少なくなると考えられる要因、（+）は発生量が多くなると考えられる要因を示しています。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫で越冬し、春に羽化した成虫が発生源となるので、前年秋に多発した園では注意する。
 (2) 通常、第1回目のふ化期は5月末～6月始めで、4回世代を繰り返す。
 (3) ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。

- ・「発生生態及び防除上注意すべき事項」は、当該病害虫の生態、薬剤防除や耕種的防除方法の留意事項、要防除水準等を示しています。

IV 短期暴露評価の実施に伴う農薬の変更登録について

農薬の登録にあたっては、これまで、残留農薬の摂取量について、一日摂取許容量(ADI)を超えなければ食品安全上問題ないものと判断されてきましたが、今般、急性参照用量(ARfD)を超えないかという点についても評価されること(短期暴露評価)となりました。

今後、現在登録を受けている農薬について、順次、急性参照用量が設定されるとともに、短期暴露評価が実施されることとなります。

この結果、登録内容が変更される場合、変更登録が申請された段階で、農薬メーカーから変更登録の内容(商品名、変更事項等)が発表されます。これらの農薬は変更登録前であっても、変更後の使用方法に基づいて使用するようになります。

1 使用方法が変更された農薬

有効成分 (変更年月日)	主な商品名	変更内容※
アセフェート (平成26年11月17日)	オルトラン水和剤、オルトラン粒剤、オルトランDX粒剤、 ジェイエース水溶剤、ジェイエース粒剤、 スミフェート水溶剤、スミフェート粒剤、 ジェネレート水溶剤、ジェネレート粒剤	適用作物削除 適用時期変更 適用回数変更 希釈倍率変更
ジメエート (平成27年2月4日)	ジメエート乳剤、ジメエート粒剤 ベジホン乳剤	適用作物削除
フルバリネート (平成27年2月18日)	マブリック水和剤20、マブリックEW マブリックジェット	適用作物削除 使用時期変更
フェナリモル (平成27年2月18日)	ルビゲン水和剤、スペックス水和剤	適用作物削除
NAC (平成27年2月18日)	マイクロデナボン水和剤85 デナボン水和剤50	適用作物削除
カルボスルフアン (平成27年7月8日)	アドバンテージ粒剤、アドバンテージS粒剤、 ジャッジ箱粒剤、オンコルOK粒剤、オンコルスタークル粒剤、 オンコルマイクロカプセル、オンコル粒剤1、 ホームガーデン粒剤、オンコル粒剤5、 オンダイアエース粒剤、ガーデンホスピタル粒剤、 グランドオンコル粒剤、ガゼット粒剤	適用作物削除

(平成27年7月23日現在)

2 今後使用方法が変更される予定の農薬

有効成分 (変更予定年月日)	主な商品名	変更内容※
シハロトリン (未定)	サイハロン水和剤、サイハロン乳剤、 ビリーブ水和剤	適用作物削除

(平成27年7月23日現在)

※ 変更の詳細については下記の農林水産省、農薬工業会(要登録)などのサイトに確認することができます。また、上記の有効成分の農薬を使用されている方は使用方法をご確認の上、使用していただきますようお願いいたします。

農林水産省：<http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/>

農薬工業会：http://jcpa-seigen.jp/?page_id=5&reauth=1 (要登録)

詳しくは、京都府農林水産部食の安心・安全推進課のウェブサイト(<http://www.pref.kyoto.jp/shokuanzenbosai/news/documents/tankibakurohyoka.html>)をご参照願います。

※病虫害防除については、病虫害防除所・最寄りの農業改良普及センター又は農協にご相談ください。

詳しい農業情報は、農林水産省ホームページの「農業コーナー」の「農業情報」をご覧ください。

ホームページアドレス http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_info/index.html

農業改良普及センター		電話番号一覧
・ 京都乙訓	農業改良普及センター	0 7 5 - 3 1 5 - 2 9 0 6
・ 山城北	農業改良普及センター	0 7 7 4 - 6 2 - 8 6 8 6
・ 山城南	農業改良普及センター	0 7 7 4 - 7 2 - 0 2 3 7
・ 南丹	農業改良普及センター	0 7 7 1 - 6 2 - 0 6 6 5
・ 中丹東	農業改良普及センター	0 7 7 3 - 4 2 - 2 2 5 5
・ 中丹西	農業改良普及センター	0 7 7 3 - 2 2 - 4 9 0 1
・ 丹後	農業改良普及センター	0 7 7 2 - 6 2 - 4 3 0 8

農作物病虫害情報サービス

- ・ ホームページアドレス
<http://www.pref.kyoto.jp/byogai/>

京都府病虫害防除所

〒621-0806 京都府亀岡市余部町和久成9

TEL 0771-23-9512

FAX 0771-23-6539

－ 農薬の使用にあたっては使用基準を遵守すること －